



産地として品質の良いりんご生産を ～新しく設定された着色目安～

飛馬ふじ研修会の内容

新しい着色目安のスタート

今年産からスタートする新しい着色目安でのリンゴ取扱い。現在、つがるでは新しい着色目安を基準に葉取作業が進められている。

この背景には、地球温暖化による夏の強い直射日光での日焼け果の多発、着色待ちによる果実の軟質化等がある。

この問題に対応する為、葉摘みの仕方や剪定方法、着色優良系統への移行が勧められている。鮮度重視の販売を主眼に置き、地色が出てきたら着色を待たずに収穫する事も目揃え会や各研修で周知している。

そこで今回、7月29日の恋空研修会、8月3日の飛馬ふじ研修会にて行った葉摘みの方法や障害果の判断方法、栽培のポイントなどを紹介していきたい。

葉を重要視した栽培管理

飛馬ふじ栽培研修会にて、講師を務めた田澤俊明さんも、葉摘み

の強弱の必要性を話していた。

飛馬ふじはもともと葉とらずサ
ンふじから発祥したものであり、
糖度を上げるために1つの果実に
どれだけの葉をつけるかが重要で
ある。日焼け対策で過剰な葉摘み
を抑えると共に、果実の糖度上昇
を見据える。

葉取作業と言えば、昔は葉をむ
しり取る人もいたと言う。葉を過
剰にむしり取ってしまうと葉の枚
数が激減して果実の糖度上昇が見
込めず、果実に直射日光が当たり
続け、日焼け果が多発する。春か
ら丁寧な薬剤散布で、病害虫から
守ってきた葉を粗末に扱わないよ
う指導していた。



葉の重要性を説明

実立ちの良いりんごが成るには

研修会場となった田澤さんの園地の飛馬ふじの生育は、玉伸びも形も良いと訪れた生産者は口をそろえて言っていた。

それを聞いた田澤さんは「今のところ形がいいのはおそらく授粉が上手くいった事が功を奏したと思っている。主幹の真ん中に授粉樹を接ぎ木したことで付近の授粉が上手くいって、実立ちも「いい」と話した。

それを聞いた参加者は、今後授粉作業にもより力を入れたいと話していた。



受粉の大切さを語る

徒長枝も必要な枝

今年の広報2月号で、徒長枝の切る枝と残す枝を絵で紹介した。今回の研修会で田澤さんは徒長枝についても話していた。

徒長枝は邪魔な枝であることから大抵は切ってしまうが、徒長枝は栄養生長が強い為、樹の根っこから養分を吸い上げる力が強い。

しかし、残り過ぎても樹の養分が徒長枝に流れる為、果実が成る枝に徒長枝があると、栄養が果実に流れずに徒長枝に奪われてしまう。また、ダニが付いたり光が遮られてしまう等といった障害も生じるのであれば切る。

2月号で紹介したように、葉が大きくて枚数の多い徒長枝を残した方が養分を作り出す量が多くなるため、障害が無ければ残すのも一つの手段とのことであった。



元葉が大きい徒長枝は養分を多く作り出す



年次が無く元葉が無いものは切る対象となる

障害果が問題の恋空

恋空研修会では、昨年も話題となった芯カビ果の見分け方と、日焼け果を出さない為の葉摘みの方法について確認した。

恋空は、品種の特性として芯カビ果の発生が多く見られる傾向にある。障害果の有無は早くからのがくあ部の着色で概ね判断することが出来る。

また、正常果であってもがくあ部の着色を待つ事は、果実の軟質化を招く為、収穫遅れは注意が必要である。



恋空の障害についても説明



このように芯カビになっている可能性が高い



早い段階でがくあ部が着色していると



このような着色具合が理想となる



がくあ部まで着色し軟質化した果実

ポイントは、果実に付着している葉のみを摘み取るという事。付着している葉をそのままにしておくと日焼けに対する不安は少ないが、着色していない部分が多くなり、等級が下がる可能性が高まる。よって、葉とらずにしようとして、全体的に着色できずに裾ものリンゴが多くなってしまう。付着した葉を丁寧摘むことで、裾ものの果実を減らす目的がある。同時に、当JAで推奨している着色優良系統のつがるに品種更新をする事も、葉を過剰に摘む事無く着色が進むため、併せて更新を検討して頂きたい。

日焼けを抑える着色管理
 昨年問題となった日焼け果。葉取り作業時やその後高温が続くことで、果面の温度が上昇し日焼け果が発生する。この問題を軽減する葉摘みの方法を説明した。
 新しい着色目安として過度な葉摘みを抑えるために、果実の4分の1までの葉形、枝形は特選とした事で、葉とらずとの差は何なのか疑問に持っている生産者もいるだろう。



着色優良系統の「ひらかつがる」



今年も発生している日焼け果

つがるや早生品種の葉摘みの目安

日焼け防止の葉摘み後



葉摘み前



付着した葉を摘み取るだけで着色する為、過剰な葉摘みは行わない

残り葉で果実に日傘を創るイメージ

葉摘みと言っても南側北側であることや下枝上枝に位置している事で、葉摘みの仕方が変わってくる。例えば南側に成っている果実であれば過剰な葉摘みを行わなくても、日光が当たる為着色が進む。逆に北側であれば日光が強く当たることが少ない為、南側よりも強い葉摘みが必要となる。

このように果実の成っている場所で葉摘みの仕方を変える事で効率良く着色を進め、葉の枚数を確保できる。

※上写真は下枝に成った果実である

従来の葉摘み後



過剰な葉摘みによって日焼けが発生する

産地一体となった取組

今回、恋空、飛馬ふじ研修会の内容を紹介したが、今後紫外線が強く気温が高い日が続くこの時期に、葉摘みをする早生ふじ系の品種も同じ方法で取り組んで頂きたい。

また、研修に参加できなかった生産者には、この記事を参考に葉摘み作業を進めて頂きたい。

この取組を生産者一丸となって取り組むことで、鮮度維持や良食味等のイメージアップにもなり、その結果所得向上へ繋げていく事が出来る。

現在消費地では、果実の軟質化により「早生品種のリンゴは赤いと軟らかい」といったイメージが持たれている。

コロナ禍で試食販売が難しいとされているが、こうした鮮度と食味を重視の取組を続けていく事で、消費地の信頼を得ることができ、産地の維持へと繋がっていく。

これからの温暖化に対応していくよう、当JAでも対策を講じて参ります。